

# ヴァイマル期ドイツにおける「西洋」概念の政治化

——ヘルマン・プラッツと雑誌『アーベントラント』

板橋拓己

I はじめに——政治的な闘争概念としての

「アーベントラント」

戦間期から一九六〇年代にかけて、主にドイツ語圏において「アーベントラント (Abendland 西洋)」というスローガンを掲げてヨーロッパの連帯を説き、ある種のヨーロッパ統合を唱導した「アーベントラント運動」なるものが存在した。本稿の目的は、ドイツ現代史学やヨーロッパ統合史研究で近年注目を浴びつつある、このアーベントラント運動の出発点を探ることである。アーベントラント運動の特徴は、戦間期から戦後にかけての人的・思想的な連

続性であり、本稿の具体的な対象は、ヴァイマル共和国期ドイツで刊行されていた月刊誌『アーベントラント』と、それを取り巻くネットワーク、そしてその主導者であったボン大学のロマニスト、ヘルマン・プラッツの思想である。

本論に入る前に、そもそも「アーベントラント」とはいかなる概念か、この概念の由来を確認しておこう。

Abendland は、ドイツ語で「晩」「夕方」を意味する Abend と「土地」を意味する Land が組み合わされた語であり、「陽の沈む地」を意味する。英語だと Occident に対応するものであり、語源的には「ヨーロッパ」とも重なっている。通例、「西洋」と邦訳されるが、文脈によっては「西欧」とも「ヨーロッパ」とも訳されてきた。

問題は、この「アーベントラント」が政治理念やスローガンに転じたときである。この場合「アーベントラント」は、単なる地理的表象ではなく、「西洋」共通の文化的な紐帯に基づいたヨーロッパ諸国民・諸民族の連帯を説く概念として機能する。この政治化の端緒は一九世紀にある。

「アーベントラント」は、フランス革命の理念に対抗するものとして、メッテルニヒ時代に保守主義者やロマン主義者たちのあいだで流通した (Schmidt 1999: 24)。こうして「アーベントラント」は、とくに保守派のヨーロッパ主義者の政治的語彙として定着していく。

そして、この概念を人口に膾炙させたのは、第一次世界大戦が終結した一九一八年に第一巻が出版され大ブームとなったシュペンゲラー (Oswald Spengler, 1880-1936) の『西洋の没落 (Der Untergang des Abendlandes)』である。

『西洋の没落』は術学的な歴史哲学および比較文明論であり、西洋世界の「没落」をストレートに論じたものではない。それでもこの本をベストセラーとしたのは、何よりも「ヨーロッパの自殺」(教皇ベネディクト一五世)と評された第一次世界大戦の衝撃と、それを待ち受けていたかのような強烈なタイトルである。シュペンゲラー自身の言によると、『西洋の没落』というタイトルは大戦前に決まっ

てを越えた組織化は、第一次世界大戦以前にまで遡ることができる。例えば、マリア・ラーハ修道院周辺の典礼運動 (Liturgische Bewegung) やカトリック・アカデミカ連盟 (Katholischer Akademikerverband) の存在が挙げられよう。これら教会と結びついたカトリック知識人の運動は、「アーベントラント」概念の普及とともに、各国宗派政党の国際的協働に寄与することになる (板橋二〇一二b)。のちにフランス外相として欧州石炭鉄鋼共同体を導くロベール・シューマンも、典礼運動の最初のドイツ会合 (一九一三年) に参加しており、典礼運動が「将来のヨーロッパのための礎石」であったと第二次世界大戦後に回顧している (Müller & Pichla 1999: 21)。

そして、これらの運動に従事していたボン大学のヘルマン・ブラッツの主導で一九二五年に刊行されたのが、雑誌『アーベントラント (Abendland. Deutsche Monatshefte für europäische Kultur, Politik und Wirtschaft)』である。この雑誌への寄稿者を知りた挙げておくと、ディルクス (Walter Dirks, 1901-1991)・タリマン (Waldemar Gurian, 1902-1954)・ローレン (Eugen Kogon, 1903-1987)・ネルヒプロイニンダ (Oswald von Nell-Breuning, 1890-1991)・シムツァー (Carl Schmitt, 1888-1985)・オトマール・シュパン (Othmar Spann, 1878-1950)・

いた。しかし、彼の意図を超えて、世界大戦の終結とともに「西洋の没落」というフレーズは独り歩きし、多くの人びとの世界認識を規定した。そして、「西洋の没落」を喚く人たちのあいだで、「アーベントラント」は、大戦によって破壊されてしまったヨーロッパの全一性を取り戻すための一つのシンボルとなったのである。

こうして「アーベントラント」は「政治的な闘争概念」 (Faber 2002) となった。この概念は、とりわけカトリック層に持て囃されることとなる。それにはいくつか理由があるが、とくにドイツのカトリックにとっては、敗戦と帝政の瓦解が、プロイセン・プロテスタントを中心としたドイツ帝国の社会・秩序モデルの崩壊と認識されたことがある<sup>\*)</sup>。そして、戦後も長く占領下にあったライントのカトリック知識人を中心に発刊され、「ヨーロッパの統一」をアピールすることになるのが、雑誌『アーベントラント』である。

## II 雑誌『アーベントラント』 (一九二五〜一九三〇年)

大陸ヨーロッパのカトリック知識人や政治家たちの国境

ストウルツォ (Luigi Sturzo, 1871-1959) から当時のカトリック知識人・政治家の錚々たる面々が揃っている。さらに『アーベントラント』は、旧ハプスブルク君主国の貴族ロアン公爵 (Karl Anton Prinz Rohan, 1898-1975) が主導し、欧州知識人ネットワークの一角を形成していたヨーロッパ文化同盟 (Europäischer Kulturbund/ Fédération des Unions Intellectuelles) および月刊誌『ヨーロッパ・レビュー (Europäische Revue)』と密に交流していた<sup>\*\*)</sup>。

実際に『アーベントラント』を担った人々を見ると、まず編集責任者 (Herausgeber) には、当時指導的な役割を果たしていたカトリックの出版者、政治家、知識人が就いていたことが分かる (Bock 2006: 346-352)。例えば出版関係者では、中央党機関紙のなかで最も発行部数が多い『ケルン人民新聞 (Kölnische Volkszeitung)』の中心人物だったヘーバー (Karl Hoeber, 1867-1942) とシュトッキール (Julius Stocky, 1879-1952) がいた。また、中央党左派に属し、ヘルリンの日刊紙『ゲルマニア (Germania. Zeitung für das Deutsche Volk)』の編集長を (党内右派のパーベンが一九二七年に同紙の実権を握るまで) 務めていたキュンツァー (Richard Kuenzer, 1875-1945) も『アーベントラント』の編集責任者に名を連ねている。キュンツァーは、カ

トリック政党の国際ネットワークであるSIPDICのドイツ代表団の一人であり、「ヨーロッパ合衆国」の唱道者だった(板橋二〇一三:七九)。

政治家では、オーストリア首相ザイベル (Ignaz Seipel, 1876-1932)、首相在任一九二二年五月〜二四年一月、二六年一〇月〜二九年五月)や、レルヒェンフェルト伯 (Hugo Graf von Lerchenfeld-Köfering, 1871-1944) がいる。周知のようにザイベルは、高位聖職者・神学教授であると同時に、一九二〇年代にオーストリア・キリスト教社会党の総裁を務めた大政治家である。首相在任時には国際連盟に忠実な外交政策をとりつつ、オーストリアの経済再建に努めた。また、元バイエルン首相のレルヒェンフェルトは、一九二六年七月にオーストリア駐在ドイツ公使に就任し、独逸関係の強化に尽力した人物である。このオーストリアとバイエルの大物に加え、ライン中央党の重要人物ホリオン (Johannes Horion, 1876-1933) とハーマンナー (Wilhelm Hamacher, 1883-1951) も編集責任者を務めていた。

さらに『アーベントラント』の編集責任者には学者・知識人もいたが、彼らは概してカトリック左派に位置する人々だった。例えば、フライブルクなどで教授を務めた社会倫理学者ブリーフス (Götz Briefs, 1889-1974) は労働者

また二代目主筆のベッカー (Werner Becker, 1904-81) は、カール・シュミットの指導を受けた法学博士であり、三代目にして最後の主筆クライン (Karl Klein) は、カトリックの学生サークルである「ゲレス・サークル (Gores-Ring)」に活動基盤を有し、攻撃的な政治的カトリシズムを展開した。概して主筆陣は、編集責任者たちよりも攻撃的で、同時代の「保守革命」と呼ばれる人々に近い思想の持ち主であったといえよう (Bock 2006: 353f)。

多種多様な寄稿者や、カトリック諸政党・諸団体の名士を集めた編集陣を一瞥すれば分かるように、『アーベントラント』は、特定の政治的立場を表明する雑誌とはいえなかった。ライン中央党に近い人が相対的に多いものの、政党政治的な議論はほとんど『アーベントラント』では展開されていない。カトリックの個別の利害集団を代表した他のカトリック系メディアとは異なり、『アーベントラント』は、カトリックという緩やかな紐帯をもとにした、さまざまな意見のプラットフォームの形成を志向したといっ

てよいだろう。

政治関連の記事としては、ドイツの国制をめぐるものや、ヨーロッパ政策・国際連盟政策に関するものが多く、日常政治を論じたものは少ない。とくに初期においては、

の「疎外」を研究していたし、また同様にケルン大学の社会倫理学者ブラウアー (Theodor Brauer, 1880-1942) は「連帯主義的な」労働組合を唱え、ヴァイマル共和国末期にケーニヒスヴィンターのキリスト教系労組の教育組織を指導した人物であった。他にも、カトリック・アカデミカー連盟の創設者シュンヒ (Franz Xaver Münch, 1883-1940) や、シュンヘン大学の法史学者であり、ヴァイマル憲法の起草にも関わったバイエルレ (Konrad Beyerle, 1872-1933)、高名なカトリック思想家デンプフ (Alois Dempf, 1891-1972) が編集責任者に名を連ねている。

雑誌編集の日常的業務を司る主筆 (Schriftleiter) にも目を向けてみよう。編集責任者がカトリック系諸組織の名士をバランスよく集めたものだった一方、主筆には若くアグレッシブな知識人が就いた。初代主筆であるオーストリアのシュライフォークゲル (Friedrich Schreyvogel, 1899-1976) は、ウィーン大学で国家学を学んだのち、文筆家として活躍しながら、ロアンの信奉者としてヨーロッパ文化同盟の創設に加わった人物である。一九二七年にオーストリアのカトリック文筆家連盟会長に就任したため、『アーベントラント』の主筆からは退くが、引き続き編集責任者には留まり、同誌でオーストリアの立場を代弁し続けた。

きわめて抽象的な論説が多い(時代が下ると、独逸合邦(アンシユルス)や、教育政策、社会政策など、個別問題に関する論説が多くなるが)。またとくに目立つのは、ドイツ以外のヨーロッパ諸国の政治、社会、文化に関するレポートである。実際、外国からの寄稿が実に多い。

このように、雑誌『アーベントラント』を党派的なスペクトルのなかに位置づけるのは難しい。とはいえ、大きな目的と基調は明確である。この点は、『アーベントラント』のよき理解者ロアンが、自身の雑誌『ヨーロッパ・レビュー』で次のように簡潔に纏めている。

「ドイツ・カトリックの生命線は二つの目標を指し示している。この二つは、並んでいるのではなく、連続している、あるいは入り混じっているといった方が良くかもしれない。つまり、ドイツの統一とヨーロッパの統一、民族共同体 (Volksgemeinschaft) とアーベントラントまたは統一ヨーロッパ (geinigtes Europa) である。この課題に、「一九二五年」一〇月一日に創刊号が出版された『アーベントラント』は取り組んでいる。『ヨーロッパ・レビュー』はこれを心から歓迎する」(Rohan 1925: 140f)。

つまり、「ドイツの統一」と「ヨーロッパの統一」を不可分のものと捉え、両者の結合とその同時の達成を目指すこと、これが『アーベントラント』の基調であった。そして、この基調の設定に最も重要な役割を果たしたのが、ヘルマン・プラッツという人物である。

### Ⅲ ヘルマン・プラッツの 「アーベントラント」思想

#### 1 プラッツとは誰か

ボン大学のロマニストであったヘルマン・プラッツ (Hermann Platze, 1880-1945) は、『アーベントラント』の編集責任者のなかで最も同誌に影響力を持った人物である。シュベンクラーの著作以来「アーベントラント」概念は流行したが、この概念をカトリックの側から、早くからポジティブなかたちで鍍直したのがプラッツである。また彼は、偏狭なナシヨナリズムを非難し、キリスト教に基づいたヨーロッパ諸民族の連帯、とりわけ独仏間の連帯を説き、その文脈から相対的安定期におけるシュトレーゼマン

外交も支持した。では、いかにしてプラッツは「アーベントラント」という概念に辿りつき、この概念に何を託したのか。まずはプラッツの人生を追ってみよう。<sup>\*)4</sup>

ヘルマン・プラッツは、一八八〇年一月一日、農家・ビール醸造業者の息子としてプファルツのオッフエンバッハに生まれた。プラッツは少年の頃から、父が購読していたフランス語の『メス新報 (Courrier de Metz)』に目を通し(メスはこのときドイツ帝国領)、伯父の蔵書から一七・一八世紀のフランス文学書を借りて読み漁っていたという。他にもプラッツはスペイン語やイタリア語も好み、早くから習得していた。ロマニストになるための素養は少年時代に身につけていたといえよう。



写真1 ヘルマン・プラッツ  
(出所) Becker 2007: 22.

プラッツは一九〇〇年にプファルツのランダウでアビトゥーアを取得し、ヴェルツブルク大学、ミュンヘン大学で神学などを学んだのち、一九〇五年にミュンスター大学で言語学の学位を取得した。この時期プラッツは、いくつかのカトリック改革派のサークル(クライス)に所属している。例えば、学友アベレ (Theodor Abele, 1879-1965) とともに、ヴェルツブルクの神学者シエル (Hermann Schell, 1850-1906) を中心としたクライスに属していた。また、アビトゥーアを取得した一九〇〇年に、マルク・サノンニエ (Marc Sangnier, 1873-1950) およびフランスの「シヨン (Sillon 畝)」運動と出会い、そのキリスト教民主主義と平和主義に感銘を受けた。さらにプラッツは、カトリック社会運動の指導者ゾンネンシャイン (Carl Sonnenschein, 1876-1929) とも接している。

このように二〇代の時期に青年プラッツは、「シヨン」運動などのカトリック左派、あるいはキリスト教民主主義派に共感を寄せていた。しかし、一九一〇年に教皇ピウス一〇世が「シヨン」の「近代主義」を批判して破門したとき(アーレティン 一九七三:一八二—一八三)、プラッツはそれに従った。この事件は、プラッツが「近代」を再考するきっかけとなる。

ともあれ、その後もプラッツは積極的にカトリックの諸運動に関わっていく。彼の周りにはブリューニングやロペール・シューマンもいた。こうした面々が、前述のマリア・ラーハの典礼運動やカトリック・アカデミカー連盟の創設に関わっていたのである。またプラッツは文筆活動にも勤しむ。ムート (Carl Muth, 1867-1944) の『高地 (Hochland)』に寄稿していた。第一次世界大戦が勃発すると、プラッツは東部戦線に配置されるが、知仏派として重宝され、一九一五年には陸軍省、一八年には外務省に戦時プロバガンダへの協力を求められている。また、戦中にプラッツは『高地』でフランス思想の分析を次々と発表し、それらは戦後の一九二二年に『現代フランスにおける精神の闘争』という大著に纏められた (Platze 1922)。

プラッツは、戦後もさまざまなカトリックのネットワークと繋がりを持ち、そして何よりも旺盛な著述活動を展開することで、ヴァイマル共和国の言論空間で一定の知名度を得るに至った。また学位取得後、大戦前にはデュッセルドルフで、大戦後にはボンで高等学校正教諭 (Studierrat) を務めていたプラッツは、当時気鋭のロマニストだったクルティウス (Ernst Robert Curtius, 1886-1956) の推挙により、一九二四年三月からボン大学のフランス精神史の嘱託

教授 (Honorarprofessur) に就任した。

さて、ボン大学就任前後からプラッツは、「アーベントラント」という理念を著作活動の前面に押し出すようになる。例えば、それまでの論説を集めた著作のタイトルは『ラインとアーベントラントについて』(一九二四年)とされたし (Platz 1924b)、同年に出版したパンフレットも『ドイツ、フランス、そしてアーベントラントの理念』(Platz 1924a) というものだった。つまりプラッツは、一九二五年に『アーベントラント』を発売する以前から、精力的に「アーベントラント」という理念を広めようとしていたのである。以下では、些か抽象的で学術的なプラッツの「アーベントラント」理念を、二〇年代の諸著作をもとに再構成していく。

## 2 フランスへの眼差しとライン愛郷主義

まず注意したいのは、ラインラントのドイツ人というプラッツの立場である。ヴェルサイユ講和条約によって当時ライン左岸地域は連合国の占領下に入り、さらにラインラントはフランスの併合要求に晒されていた。つまり、ラインラントは大戦後も独仏紛争の最前線であり、プラッツら

ラインラントのドイツ人には、何よりもフランスに対してどう向き合うかが突き付けられていた。結果的にプラッツの「アーベントラント」理念および雑誌『アーベントラント』は、独仏の緊張が緩和した相対的安定期に受容されることになるが、その誕生の契機はラインラントのドイツ人の危機意識だったのである。現に一九二三年の時点でプラッツは、デンブフとともに『キリスト教的西洋 (Occidens Christianus)』という国際的な月刊誌の刊行を計画していた (Popping 2002: 101)。

さて、プラッツの「アーベントラント」理念の特徴と強みは、ラインラントのロマニストとして、他のドイツ知識人よりも、フランスの歴史と現状に(彼なりに)通じていたことである。一九二四年に彼は次のように書いている。

「フランスのナショナリズム (Nationalismus) に関する研究(次いでドイツのナショナリズムについての研究)は、私に次のことを教えた。すなわち、ストプラ、ナショナルな実体 (übernationale Substanz) に、しっかりと繋ぎ合わされた場合にのみ、ナショナルな激情 (nationale Leidenschaft) は、克服されうる、ということ<sup>5)</sup>」。

こうしてプラッツは、大戦後の独仏関係の改善を「スープラナショナルな」形でめざす。その際、フランスの民主主義的な改革派のカトリシズム運動が、当地で支配的な反独ナショナリズムを覆すことを彼は期待した。それゆえ、『アーベントラント』に寄稿したプラッツの論説には、フランスのカトリシズムに関するレポートが多い(板橋二〇一三: 八七、注二九)。

このようにプラッツは知仏派であり、親仏派ともいえる人物であった。ただし、それ以上に、あくまでドイツ愛国主義者であり、何よりもライン愛郷主義者であったことは強調しておきたい。フランスのラインラント併合要求には断固反対したし、フランス側からラインラント併合に協力するよう依頼された際には、強く反発した (Platz 1919)。あくまでラインは「生粋のドイツの地であり、永遠にドイツの地」なのであった (Platz 1924a: 122)。

そしてプラッツの「アーベントラント」思想は、まさにライン中心主義と呼ぶべきものである。『アーベントラント』の創刊号で彼は次のように述べる。

「われわれは、ドイツ的な精神から、ドイツの地で、人文主義的・キリスト教的な生を歩み続けようとして

いる。東と北からは、恐ろしい軍隊、遅しい男たち、沈黙考する人、怖いもの知らず、思い焦がれた欲望が流れ込んだ。他方、南と西からは、本質を捉え、思想と目的が明確で、しばしば冷酷で打算的な人々が到来した。この間にわれわれは、かつて地中海の岸辺に花開いた、到達可能で分別のある人間存在の様式を、東と北に約束した。またわれわれは、永遠のロマン主義の地で偉大な生の魔力から生じた生命力と想像力を、西と南に約束した。／アーベントラントの文化 (abendländische Kultur) は、南海から北海まで、南西から北東まで行き渡る。ライン川こそ、宿命的な中心点であり、継ぎ目、結線、精神的な転換点であり、摂取や移行や継続が行われる地なのではないだろうか。」(Platz 1925: 5)。

そして「アーベントラント」は、ライン川を中心に、ドーム状に広がっている (überwölbt) のである (Platz 1924a: 122)。

### 3 宗教と生の有機的な結合としての「アーベントラント」理念

プラッツによると「アーベントラント」は「知覚可能な」「現実」であり、「歴史的な力」であり、「理念 (Idee)」である。この理念は、「地域的には、(landschaftlich) カール大帝による生存圏 (Lebensraum) と結びついている」とされた。「ロシアは、ビョートル大帝やその後継者たちによる西欧化の試み (Verwestlichungsversuche) にもかかわらず、決してそこに属してはいない」一方で、「イギリスは、アーベントラントを越えて、目的に基づく繋がりのなかで広がり続けている」。つまり、「西欧化」に至らないロシアと、広大な植民地を持つ海洋帝国イギリスは「アーベントラント」から除外されている (Platz 1924a: 122f.)。また、「内容的には (inhaltlich) この理念は、古典古代、キリスト教世界、そしてロマンティック、ゲルマン的な諸民族の実生活のなかから生まれた」という。プラッツの長い説明を煎じ詰めると、「宗教と生の有機的な結びつき」が「アーベントラント」理念を育んだのである (Platz 1924a: 123)。

しかし、この宗教と生の有機的な結合は現代では失われた。「生の世俗化と物象化」が生じたのである。プラッツはその帰結をさまざまな領域で観察しているが、ここでは「政治」の領域について確認しておこう。プラッツによると、「宗教と生の繋がりの粉砕」は「宗教と政治の繋がりの粉砕」も意味した。これに伴い、「政治の領域においては、国家の利害、ネイションの価値、人種の優先が、一方的に前面に押し出され、それにより、全体 (das Ganze) と個 (das Einzelne) を不断に支えるべき平和政策 (Friedenspolitik) はいっそう困難になってしまった」。世俗的な権力国家とナショナルリズムの台頭により、本来ならば「アーベントラント」という「全体」に対する「部分」であるべき「国民国家 (Nationalstaaten)」は、権力政策とアウタルキーを追求し、相争うようになった。独仏関係についても、「リシュリユーとピスマルクのあいだ」の時代に、「ナショナルなエゴイズム」と「ナショナルなメシアンイズム」が放たれた。「アーベントラントの統一性と共同体は救いようもなく破壊されてしまった」のである。そして、「この歪みと硬直を決定的に示すが、ラインの現状」であった (Platz 1924a: 123-126)。

プラッツは、かかる現代を「秩序と形式を喪失した

(Ordnungs- und Formlosigkeit)」時代と規定する。「形式」を回復するには、社会を有機的に繋ぐ(あるいは繋ぎ直す)しかない。例えば、中央党の依頼で一九二五年八月一日の憲法記念日にライヒ大統領、政府、議会の前で演説する機会を得たが、そこで開陳されたのは、プラッツのヴァイマル憲法への熱烈な支持とともに、有機体論的な世界像であった。「各構成要素 (Glieder) が全体に奉仕するとき、ドイツは再び花開き、新たな日を迎えることができるでしょう。そして、ヨーロッパや世界も、精神的な全体として、独立した実体の担い手として」……」認識されたならば、再び形式を取り戻すでしょう\*9。またプラッツは、『アーベントラント』創刊号の巻頭言でも次のように述べている。

「本誌は、散り散りになったものを再び集め、道を踏み外したものを正しき方向に戻し、われわれがナショナルな孤立の時代において失った全体性への限りなき愛によって、あらゆるものを統一性へと結びつけるだろう。われわれは確信している。生き生きと過去を振り返る精神の試みと、未来への見通しによって、まさにドイツ民族において、時代精神が押しつけた最良の

力が、全体の至福のために再び發揮されることを。そして、ドイツの諸族、諸身分、民族、国家が、新たな秩序ライヒ (Ordnungsreich) へと有機的に組み合わせられることによって、新しい力と、個々の生の新たな充足を見いだすことを\*10。

そして、プラッツにおいては、秩序を回復し形式を付与できるのは、カトリシズム以外になかった\*11。

「ヨーロッパの運命が描かれている教会の伝統という枠組みにおいて、カトリックが、アーベントラントの実体を意識するのは比較的容易い。カトリックはこんにち、この生の統一性 (Lebensinheit) の唯一の有機的な担い手である。……」自らの力と責任でこの実体を再び得るのは、プロテスタントにはより難しいだろう。自由思想家にはもつとも困難である\*12。

そして、とりわけ敗戦国である「ドイツは、工業家や金融業者ではなく、カトリックを通して、精神世界の全体性と有機的に繋がっている」のであり、ドイツのカトリックは「特別な課題」を負っているのである (Platz 1924a: 138)。

こうして、「アーベントラント思想の目的」は次のように定式化される。つまり、「教会権力と世俗権力の理性的な協働を通じて、各構成要素が自律的かつ連带的に存在でき、キリスト教的な平和を獲得し保障するような、一つのライヒ (ein Reich) を打ち立てること」である (Platz 1924a: 140)。

#### 4 近代批判とフェルキッシュ批判

かかる有機的な「アーベントラント」思想と表裏一体のものとして、プラッツの著作には激しい「近代 (Moderne)」批判が見られる。プラッツの近代批判は、一九二四年に出版された論文集『大都市と人間存在』で最も鮮明に表れている (Platz 1924c)。そこで展開されるのは、当時のカトリックによるお馴染みの近代批判である。つまり、近代化によって、世俗化および個人主義化が促され、人間は孤立し、価値も崩壊し、現代社会は精神的にも政治的にも貧困になった、という具合である。

ただ、ここで着目したいのが、プラッツがかかる近代批判を展開する際に参照したのがラガルド (Paul de Lagarde, 1827-91) だったということである。ラガルドはフェルキッ

体に関連付けること、個を全体のなかで動的に想定すること、「フェルキッシュには」まさにこれが欠けているのだ！」<sup>\*11</sup>

こうしてプラッツは、反近代的なドイツ愛国主義者でありながらも、フェルキッシュなナシヨナリズムは拒否することとなった。

#### 5 ナチ政権とプラッツ

プラッツは一九三三年のナチ党の権力掌握後もしばらくは無事だったが、ナチは彼を見逃さなかった。一九三四年一月に作成されたナチの大管区指導部の文書にはこうある。

「ボン大学のなかでは、プラッツ教授が一月体制「ヴァイマル共和国のこと」の典型的な代表者の一人である。ファナティックな政治的カトリックとして、彼は現在でも、ザール地域やルクセンブルクの政治的カトリシズムのあいだで人望を集めている。そのうえ彼は、きわめて遺憾なかたちで熱烈な親フランス政策

シュ思想の祖の一人であり、一部の研究ではナチの源流と位置づけられる人物である (スターン一九八八、モッセ一九九八)。ラガルドは、ドイツに蔓延する「非精神性 (Ungeistigkeit)」の原因を「プロイセン的」ドイツ的な様式」の普及に見た。ラガルドにとって、それは「人造的 (Homunklität) かつ人工的なもの (Kunstoprodukt)」であった。プラッツは、こうしたラガルドの同時代ドイツに対する診断を評価したのである。<sup>\*13</sup>

しかし、プラッツはラガルドを肯定したわけではない。ラガルドは、現代ドイツの病を「ゲルマン的な」「魂の文化 (Seelenkultur)」に還ることによって克服しようとした。しかしかかる態度は、プラッツから見ると「古ゲルマンへのロマン主義的な逃避」(これが彼のラガルド論のタイトルでもある) に過ぎなかった。また、プラッツの「スープレナシヨナルな」有機的思考にとつて、フェルキッシュ思想は狭隘であった。プラッツは、戦間期ドイツに普及したフェルキッシュ思想・運動に対して不満を述べている。

「本質や権力から逃避しまいという意志を、最も強力に、しかし最も近視眼的で最も盲目に有しているのが、フェルキッシュである。[...]しかし、個を全

を長きにわたって主張しており、当然ながらフランスの多くのサークルで格別の共感を呼んでいる。その一方で、われわれの見るところ、彼はいかなる国民社会主義の思想も受け入れていない。ボンで彼は、いみじくも「共和国広場 (Platz der Republik)」という渾名をつけられている。ボン大学から彼を解雇することは、われわれの運動の立場からは絶対に必要である」 (Hausmann 1993: 69)。

こうしてプラッツは、一九三五年三月にボン大学の職を解かれてしまう。この措置に対しプラッツは、当初は沈黙していたが、子どもたち (当時二〇代の四人の息子と一人の娘がいた) の名誉のため、三六年二月二〇日に正式に解雇の撤回を求める文書を提出した。その文書では、世界大戦への貢献をはじめ、プラッツのドイツ愛国主義とライン愛郷主義が強調されていたが、ナチスへの阿りはなかった。<sup>\*15</sup> 結局、復職は叶わなかった。その後プラッツは、バスカルやボードレルなどについて、細々と文筆活動を続けた。またニーチェやH・S・チェンバレンなど時局に沿うような対象も扱っているが、それでも決してナチ的な解釈が開かれていたわけではない。

プラッツは、敗戦後の一九四五年五月二八日、ロベール・シューマンの推挙でノルトライン州の文化部長（のちのノルトライン・ヴェストファーレン州の文部大臣にあたる）に任命されるが（Becker 2006: 258）、具体的な活躍をすることなく同年二月四日にこの世を去る。死後出版された回顧録で、プラッツは「わたしは常にドイツ人であると同時に西洋人（Abendländer）」として行動した」と記している（Platz 1948: 55）。

## おわりに

プラッツに代表されるヴァイマル共和国期ドイツの「アーベントラント」は、何よりも反近代の理念であった。ナショナリズムの猖獗など諸悪の源を「近代」に求め、全一なるキリスト教的共同体としてヨーロッパを再生させようという願いが「アーベントラント」には込められている。もちろん、こうした「アーベントラント」理念の反近代性を批判することは容易い。また、プラッツらは非ナチを貫いたものの、『アーベントラント』周辺の少なからぬ数がナチに流れた。「アーベントラント」は「ライ

ヒ」理念を鏝にして、ナチスの「新秩序」と結びつく可能性も含んでいたのである。<sup>\*6</sup>

他方で、こうした反近代的な理念が、ヨーロッパ統合を準備し、また下支えたことも強調しておきたい。第二次世界大戦後、「アーベントラント」理念は、ドイツ連邦共和国で積極的に受容されていく。ヴァイマル期の「アーベントラント」理念が備えていたいくつかの特徴、例えばナショナリズム批判や、宗教的・文化的なトーンは、ナチズムに倦んだドイツ人に心地よい響きを持った。また、「アーベントラント」のライン中心主義的・親フランスの特徴は、他のドイツ語のヨーロッパ秩序概念よりも、第二次大戦後の分断欧州の時代に適合的だったのだろう（対照的な例として、戦後にナチのイデオロギーと重ね合わせられ、東西分断のなか時代適合性も失った「中欧（Mitteluropa）」概念がある。「中欧の復活」は一九八〇年代を待たねばならない。板橋（二〇一二a）を参照）。さらにいえば、本稿で見てきたように、「アーベントラント」理念はきわめて抽象的で具体性を欠くものだったが、その抽象さゆえに、機能主義的・経済的に進んだ実際のヨーロッパ統合を観念的に補完できたのかもしれない（Müller & Pichia 1999: 19）。ともあれ、戦後の分析は別稿に譲りたいが（さしあ

たり板橋（二〇一）を参照）、「アーベントラント」は、冷戦を背景に「西側結合」を進めていく西ドイツ政府の外交政策を支える役割を果たすのであり、その理由を考える際には、戦間期にまで立ち戻る必要があるということができる。

### ●注

\*1 最も重要な研究としてSchmidt (1999)、Conze (2005)。邦語では板橋（二〇一）。アーベントラント運動も含む、西欧の保守派のトランスナショナルなネットワークに関する最新の研究としてGroßmann (2014)。第二次世界大戦以前の「アーベントラント」言説についてはPopping (2002)が包括的である。

\*2 ドイツ・プロテスタンティズムと第二帝政の結びつきおよび帝政崩壊とプロテスタンティズムの対応については、深井（二〇一）を参照。

\*3 ヨーロッパ文化同盟の目的は、ロアンによると「高次のエリート・レベルで、ヨーロッパ意識の担い手としての精神的・社会的な上流階級の形成を支援すること」とあり、最盛期には一四カ国にまたがる活動を見せていた（Rohan 1954: 56）。ロアンとヨーロッパ文化同盟については、Müller (2005)に詳しい。中東欧史の視点からロアンを論じたものとしては福田（二〇一四）がある。

\*4 プラッツの経歴についてはBecker (2006, 2007)。

Berning (1980) を参照。

\*5 本書は、ライン問題に関するライン中央党のパンフレットの一冊として出版された。本書を引用する場合は、ページが一九八〇年に編纂した版のページ数を記す。

\*6 “Von politischer Not und von abendländischer Idee.” in: Platz (1924b: 59-64, here 61). 傍点は原文のゲシユヘルト。以下、引用文中の傍点は原文の強調（ゲシユヘルト、またはイタリック）である。

\*7 「アーベントラント」や「ヨーロッパ」を、複数のネイションの柱に支えられた円屋根・ドーム（Kuppelbau）に喩えられるのは、「アーベントラント」周辺の人々の表現によく見られる。例えば、Karl Anton Prinz Rohan, “Die Utopie des Pazifismus (1925).” in: Rohan (1930: 22-24, here 23)。

\*8 思想的には、フィヒテの選民思想からトライチユケの権力国家崇拜に至るドイツ・ナショナリズムの歴史が批判される（ただし、フィヒテの思想には普遍主義的な側面があったことも指摘されている）。この点では、カトリックによる通俗的なプロイセン的小ドイツ・ナショナリズム批判といえるのだが、プラッツの独自性は、フィヒテのナショナリズムの「形式」と「手法」が、フランスのナショナリストたち、例えばレオン・モーゼ（Leon Daudet, 1867-1942）やシャルル・モーラス（Charles Maurras, 1868-1952）らアクシオン・フランセーズの面々にも受け継がれてると論じてるところである。Platz (1924a: 127-137) を参照。

\*9 “Verfassungssprache. Rede am 11. August 1925 zum Tag

der Weimarer Verfassung vor Reichspräsident, Reichsregierung, Reichstag und Reichsrat." in: Berning (1980: 142-150, here 149).

\* 10 "Auftritt" *Abendland* 1 (D): 3. 本論説は無署名だが、明らかにブラッツに由来のものである。

\* 11 ただしブラッツは、一九二五年から「ウナ・サンクタ (*Una Sancta*)」というエキューニカルな雑誌の共同編集者も務めていた。「ウナ・サンクタ」は一九二七年四月一日にウナ・サンクタに於いて禁止された。

\* 12 "Sendung und Dienst." in: Platz (1924b: 140-150, here 147-148).

\* 13 "Paul de Lagarde's romantische Flucht ins Altgermanische." in: Platz (1924c: 97-147, here 103f).

\* 14 "Von der Auflockerung des europäischen Sinnes." in: Platz (1924b: 133-139, here 137).

\* 15 "Eingabe von Hermann Platz an das REM vom 20. Februar 1936. UAB, Personalakte Platz." in: Hausmann (1993: Dok. XXII, S. 172f).

\* 16 『アーベントラント』周辺の人々がナチズムにとった態度はさまざまである。編集責任者のなかでは、ブラッツに加え、デンプフもナチ体制に睨まれ、教職を妨害された。また、ブリーフスとブラウアーはナチの政権掌握後すぐに亡命せざるをえなかった。キェンツァーはレジスタンスに参加し、一九四四年七月二〇日のヒトラー暗殺未遂事件に関与したとして親衛隊に殺害されている。他方、カトリック・アカ

デミカー連盟のミュンヒのようにナチスと協働を図る者もいた。主筆だったシュライフオーグルは、一九三四年から（非合法だった）オーストリア・ナチ党に加わっている。「アーベントラント」とナチズムの問題は、ナチズムと近代の問題にも関連する大きなテーマであり、別稿に譲りたい。

#### ●参考文献

アーレティン、K・v (一九七三) 『カトリシズム——教皇と近代世界』 沢田昭夫訳、平凡社。

板橋拓己 (二〇一一) 『黒いヨーロッパ——ドイツにおけるキリスト教保守派の『西洋』主義』 遠藤乾・板橋拓己編「複数のヨーロッパ——欧州統合史のフロンティア」 北海道大学出版会、八一—一六頁。

板橋拓己 (二〇二二a) 『中欧』理念のドイツ的系譜「思想」一〇五六号、一〇七—一二三頁。

板橋拓己 (二〇二二b) 『西洋の救済』 (一) ——キリスト教民主主義・保守主義勢力とヨーロッパ統合、一九二五—一九六五年』 『成蹊法学』 七七号、一七—四八頁。

板橋拓己 (二〇一三) 『西洋の救済』 (二) ——戦間期における『西洋 (アーベントラント)』 概念の政治化』 『成蹊法学』 七九号、七一—九五頁。

スターン、フリッツ (一九八八) 『文化的絶望の政治——ゲルマンのイデオロギーの台頭に関する研究』 中道寿一訳、三嶺書房。

深井智朗 (二〇一一) 『ヴァイマルの聖なる政治的精神——

ドイツ・ナチショナリズムとプロテスタントキリスト教』 岩波書店。

福田宏 (二〇一四) 『ポスト・ノブスフルタ期における国民国家と広域論』 池田嘉郎編『第一次世界大戦と帝国の遺産』 山川出版社、一〇六—一二四頁。

モッセ、シヨーム・L (一九九八) 『フェルキッシュ革命——ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』 植村和秀ほか訳、柏書房。

Becker, Winfried (2006) "Wegbereiter eines abendländischen Europa. Der Bonner Romanist Hermann Platz (1880-1945)." *Rheinische Vierteljahrsblätter* 70: 236-260.

Becker, Winfried (2007) "Hermann Platz (1880-1945)." in: Jürgen Aretz, Rudolf Morsey, and Anton Rauscher (eds.), *Zeitgeschichte in Lebensbildern: Aus dem deutschen Katholizismus des 19. und 20. Jahrhunderts*, vol.12. Mainz: Matthias-Grünwald-Verlag, pp.22-33.

Berning, Vincent (ed.) (1980) *Hermann Platz 1880-1945: Eine Gedenkschrift*. Düsseldorf: Patmos Verlag.

Bock, Hans Manfred (2006) "Der Abendland-Kreis und das Wirken von Hermann Platz im katholischen Milieu der Weimarer Republik." in: Michel Grunewald and Uwe Puschner (eds.), *Le milieu intellectuel catholique en Allemagne, sa presse et ses réseaux (1871-1963) / Das katholische Intellektuellenmilieu in Deutschland, seine Presse und seine Netzwerke (1871-1963)*, in Zusammenarbeit mit Hans Manfred Bock, Bern u.a.: Peter Lang, pp.337-362.

Conze, Vanessa (2005) *Das Europa der Deutschen: Ideen von*

*Europa in Deutschland zwischen Reichstradition und Westorientierung (1920-1970)*. München: R. Oldenbourg.

Faber, Richard (2002) *Abendland: Ein politischer Kampfbegriff*. 2. Aufl., Berlin: Philo (zuerst 1979).

Großmann, Johannes (2014) *Die Internationale der Konservativen: Transnationale Elitenzirkel und private Außenpolitik in Westeuropa seit 1945*. München: Oldenbourg.

Hausmann, Frank-Rutger (1993) "Aus dem Reich der seltschen Hungersnot": Briefe und Dokumente zur romanistischen Fachgeschichte im Dritten Reich. Würzburg: Königshausen & Neumann.

Müller, Guido (2005) *Europäische Gesellschaftsbeziehungen nach dem Ersten Weltkrieg: Das Deutsch-Französische Studienkomitee und der Europäische Kulturbund*. München: R. Oldenbourg.

Müller, Guido, and Plichta, Vanessa (1999) "Zwischen Rhein und Donau: Abendländisches Denken zwischen deutsch-französischen Verständigungsinitiativen und konservativ-katholischen Integrationsmodellen 1923-1957." *Journal of European Integration History* 5 (2): 17-47.

Platz, Hermann (1919) "Um Rhein und Ehre." *Hochland* 16: 129-139.

Platz, Hermann (1922) *Geistige Kämpfe im modernen Frankreich*. München: J. Kösel & F. Pustet.

Platz, Hermann (1924a) *Deutschland, Frankreich und die Idee*

- des Abendlandes*. Köln: Verlag der Rheinischen Zentrums-Partei (auch in: Bering (ed.) (1980), pp.122-141).
- Patz, Hermann (1924b) *Um Rhein und Abendland*. Burg Rothenfels: Dt. Quickbornhaus.
- Patz, Hermann (1924c) *Großstadt und Menschentum*. Kempfen: Verlag J. Kösel & F. Pustet.
- Patz, Hermann (1925) "Abendländische Vorerinnerung," *Abendland* 1 (1): 46.
- Patz, Hermann (1948) *Die Welt der Ahnen: Werden und Wachsen eines Abendländers im Schoße von Heimat und Familie, dargestellt für seine Kinder*. Nürnberg: Glock u. Lutz.
- Pöpping, Dagmar (2002) *Abendland: Christliche Akademiker und die Utopie der Antimoderne 1900-1945*. Berlin: Metropol Verlag.
- Rohan, Karl Anton Prinz (1925) "Abendland," *Europäische Revue* 1: 140-141.
- Rohan, Karl Anton Prinz (1930) *Umbruch der Zeit 1923-1930: Gesammelte Aufsätze*, eingeleitet von Rochus Freiherr von Rheinbaben. Berlin: Verlag von Georg Stilke.
- Rohan, Karl Anton (1954) *Heimat Europa: Erinnerungen und Erfahrungen*. Düsseldorf/ Köln: Eugen Diederichs.
- Schidt, Axel (1999) *Zwischen Abendland und Amerika: Studien zur westdeutschen Ideallandschaft der 50er Jahre*. München: R. Oldenbourg.

●著者紹介●

- ①氏名……板橋拓己(いたばし・たくみ)。  
 ②所属・職名……成蹊大学法学部・准教授。  
 ③生年・出身地……一九七八年、栃木県。  
 ④専門分野・地域……ヨーロッパ政治史、国際政治史。  
 ⑤学歴……北海道大学法学部卒業(二〇〇一年)、北海道大学大学院法学研究科修士課程修了(二〇〇四年)、同博士後期課程修了(二〇〇八年)。  
 ⑥職歴……北海道大学大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター助教(二〇〇八年度～〇九年度)、成蹊大学法学部助教(二〇一〇年度～二二年度)。  
 ⑦現地滞在経験……ドイツ学術交流会(DAAD)奨学生としてドイツ・ミュンヘン大学社会科学部政治学科に留学(二〇〇二年度)。  
 ⑧研究方法……文献資料の読解。  
 ⑨所属学会……日本国際政治学会、日本比較政治学会、ドイツ現代史研究会。  
 ⑩研究上の画期……とくにこれといった「画期」はないのですが、近年のドイツ語圏で「西洋(アーベントラント)」概念が強い政治性を帯びているのを見ると、そのトポスを歴史的に辿る作業はアクチュアルなかもしれないと思っています。  
 ⑪推薦図書……蔭山宏「崩壊の経験——現代ドイツ政治思想講義」(慶應義塾大学出版会、二〇一三年)。